

橘曙覧伝の問題点について

辻 森 秀 英

一

曙覧は昨昭和四十三年に没後百年を迎えた。昭和の初め頃にもいわれた曙覧青年時代の駆け落ち事件というものが、戦後になって、暴露記事流行の波に乗って、昭和三十年前後に、再び生地、福井で喧伝されるようになった。昭和二十五年に出版された「橘曙覧歌集」の解説で、土岐善麿博士は、ある郷土史家の報告として、青年時代、京都に遊学したというのは、実は遊女と駆け落ちしたことで、連れ戻されて結婚させられたという事を取上げられ、そのついでに「小伝」(井手今滋)のいう児玉三郎の塾に入ったということもその時のことであろうかといわれている。これは恐らく戦前書かれた郷土史家の駆け落ち説と、嗣子今滋の書いた小伝とを調和された説である。

恐らく、こういう故人の回想談というものは没後何十年か経って、親戚などが言い出すものではないだろうか。回想談もいろいろあって、直接関係のあった、責任ある地位にあった人が、責任ある態度で記録の形で残したものなら信用してよいと思う。しか

し、その本人とは何十年かの隔りのある人が、誰々から聞いたという話をしたからといって、それを直ぐに取上げるのは学問的態度でないと思う。土岐博士のは、どういう報告を指されるのか分らないが、戦後私が経験したのは、明瞭な科学的根拠を示さない、所謂風説に似たものであった。それは昭和三十二年のことであつたが、科学的根拠が明らかでないから、学問的態度で取上げることは出来ないという説を私は発表した。

「小伝」は、嗣子が書いたものだから、そうした非行に似たようなことは、たとえあったとしても書かないのが普通であろうが、それかといって、坊間伝えるところを直ぐに事実として取上げることも学問的態度ではないと思う。

曙覧の子孫、一族は今なお各地に現存している。今川寿恵という人は、曙覧の長男井手今滋の三女で孫に当る。亡母ひろ子即ち今滋の妻は、曙覧の未亡人直子が九十歳前後まで生きていたのでその世話をした人である。姑から曙覧について聞いたことを覚えていて寿恵に聞かせたという。直子の生年は疑問があるが、後に触れる。寿恵の姉、二女の辰野雪子は東京に在住しているが同じ

くその母の話を伝えているということであつた。寿恵は昭和二十九年に五十八歳であつたが、その人は戦後台湾から引上げて、福井市曙覧屋敷跡に居住していた。寿恵は昭和四十年に七〇で亡くなったが、二十九年に私が直接聞いて筆録したものがいくつかわるうち、「駆け落した曙覧」の全文を纂をいとわず掲げる。

曙覧の生れた正玄家の目の先が玉井町という福井の遊廓でありました。足羽川にかかつている九十九橋の川添いにあつた大門が店から見通せたとのことでした。

十三歳の年だつたそうですが、曙覧があまり淋しそうにしているの、番頭が出入りの大工の頭梁に、どこか面白い気の浮くようなところへ連れてゆけといつたそうです。そこで、その頭梁がお茶屋へ遊びに連れてゆきました。それが病みつきになって足繁く出入りするようになったそうですが、その時仲良くなったのが「おやを」という女だそうです。可愛いお酌だつたとのことでした。

それから曙覧の茶屋遊びが始まつたようですが、十八、九歳の頃だと思ひますが、とうとうその女を連れて京都へ駆け落しました。結局連れ戻されましたが、しらみだらけになつて帰つて来ました。そこで多分親族會議の結果、安定させるため直子が三国から嫁として迎えられて来たのですが、直子の家は海津屋という船問屋でした。

その後も曙覧と「やを」の関係は絶えなかつたそうで、帳場から大門が見えるので落着かず、算盤が身にいらず、ときどき出かけたそうです。いつも大門の柳の木のそばまで「や

を」が送ってくるので、いつか直子が現場を押えようと考へ、ある日も曙覧が出ていつて帰らないので、直子は番頭を連れてその大門のそばの柳の木の下にかくれてゐると、せつたを履いておやをを連れて帰つて来たので、直子は思はず「あつ」というと、女は驚いて遊廓に逃げ込み、曙覧は一目散に家に逃げて入りました。そして、家の大戸を閉めて寝たふりをしてゐたそうです。そして、家の大戸を閉めて寝たふりをしてゐたそうです。そして、家の大戸を閉めて寝たふりをしてゐたそうです。そして、家の大戸を閉めて寝たふりをしてゐたそうです。

以上のような話であるが、この話が、祖母からの直接の実話でなく、母からの又聞きの話であるところに第一の問題があると思ふ。曙覧も青年時代であるから、そういうことがあつて不思議ではないが、それが結婚の原因に結びつけられたり、京都へ行つたのは事実勉強のためであつたのに、実は駆け落のためであつたなど、人を陥し入れるような話に変へることは、世間に、いまでもよくある事である。

第二には直接内容についての疑問であるが、十三歳の年に初めて遊廓の門をくぐつたということだが、彼は二つの年から武生の母の実家に預けられていて、十五歳で父に死別した。生家に帰つて来たのは、どんなに早く考えても、十五歳の暮れか、十六歳頃だと思はれる。これはどうであらうか。そして十三歳で遊廓通いは早や過ぎるのではないか。結婚は二十一歳だと思はれるが、十七・八歳駆け落説では多少時期がそれるのではないか。

年齢というものは間違え易いものだから、何かそこに記憶違いというものがあるかも知れないが、それにしても、こういう回顧談を直ちに事実として伝記の中に取り入れるということは躊躇されるのではないか。何分の一かの事実があったかも知れないが、このように組織立てられて、それが事実だと認めたところが、実はその何分の一は後人の虚構であつたということでもあつたら、故人に詫びる方法もない。まして、その人は既に百年前に没して、自分自身で弁明する方法を持たないのである。こうした逸話を取上げることは出来ないという考えは今も変らない。

注一 朝日新聞社古典全集『宗武・曙覧歌集』解説。

二 昭和二十九年十一月号、『百日紅』『曙覧聞書』今川寿恵。

二

曙覧の母鶴子は、彼二歳の年に亡くなったので、母の実家に養われていた。最も信頼すべき「小伝」には、何歳頃、生家に帰つたか、を記していない。そこで誰かの談話などを手懸りにして推測が行なわれるのは止むを得ないことである。最も詳しい「曙覧伝」を最初に出したのは山田秋甫氏である。同氏は、大正十五年に六十九歳であつた、山本秀子の談話の聞書を取つて、それによつて、二十歳頃まで母の実家山本家にいたであらうという推定をした。秀子という人は、曙覧の母の甥である怡遷の二女である。怡遷は明治十三年に五十一歳で没し、曙覧より十八歳下である。秀子は安政五年七月三十日生まれで、曙覧が死んだ明治元年にようやく九歳だから、曙覧の青年時代を知らうはずはない。

秀子の話は、曙覧がその頃、江戸妙法寺へ山本家の代参として行ったということが理由であるが、代参にいったということは誰からか聞いていたことに過ぎない。代参は福井の生家にも出来ることだから、山本家にいた証拠にならない。

私は昭和十三年に出版した小論文でこれを正式に取上げて、二十歳、生家へ帰るとした。山田氏の伝は「小伝」そのまま、別の個処で秀子の話を取上げていただけであつた。私の前に、島崎圭一氏は父が死んだのに長男が家に帰らないというのは変だから、父が死んだ十五歳頃帰つただろうという説を出している。しかし、この論には確かな証拠はなかった。現在、二十歳帰宅説は通説のようになって諸家が従つておられるし、土岐博士は父死後の五年間、妙泰寺にいたという説を出されている。^(註)ところが、戦後になって、曙覧の異母弟宣が継いだ本家正玄家の正統である正玄馨氏が所持される宣の書いた系歴書が発見された。その中に次のような文がある。

……至丙戌父又臥病、遂不起、而孤子皆幼齡時、伯父者故為撰津浪華志田垣氏所養、於是忽得父之計、夫妻相攜、遠歸自浪華、助宣兄弟、……

母は既に没し、というのは、曙覧の継母で宣の実母である。父が死んだのは文政九年である。孤子がみな幼い時に、大阪、志田垣氏の養子になっていた伯父夫妻が帰つて来て、宣兄弟を助けたというのである。「助宣兄弟」といったのは誰を指したのであろうか。

これも戦後所在が明らかになった、「橋氏派源」という井手今

滋の著書に付けられた系図によると、曙覧の兄弟は弟、宣、母は三国港白銀屋某ノ女、文政元年生明治四十年歿、年九十とある。

繁子、「宗家累代追遠年譜外族部」曰ク寛了院君之女、母栗屋氏、勝山里梅田文助ニ嫁ス。元治元年甲子八月十三日死」とある。寛了院は父の法名、母は第三の妻であるらしい。「宗家累代追遠年譜」というのは今のところ所在が分らない。この年譜は、他の個所に「曙覧大人ノ編纂に係ル……に曰ク」とあるので曙覧が編集したものである。繁子も兄弟といてその中に含まれていてもよいが、続いて兄曙覧の事を書いているから、宣、曙覧二人を主として言っていると見てよい。

もし、曙覧が父が死んでもなお五年も他家にいたのだったら、宣兄弟を助けるという言葉がでるかどうか、兄弟といっても、生れてから一緒に暮らしていない兄弟である。しかもこの伯父は曙覧二十二歳の年には死んでしまった。曙覧が二十歳で帰って来たのでは二年しか共に暮さないことになり、伯父に助けられたと言わないであろう。この言葉からも曙覧は父の死後間もなく帰ったと見るべきではなからうか。従って曙覧が僧明導の許に通ったのは短期間だったと思われる。

明導には学問も習ったというが、越前では、大正時代でも、一般の人がお寺へお経を習いにいくのは珍らしいことではなかった。だから、学問を習うということも手伝って、お経を習いにいくということも、案外軽い気持であったかも知れない。以上のような理由で、私自身の旧説も含めて、十五、六歳生家帰宅説に改めたいと思う。

注一 『橘曙覧伝并短歌集』大正十五年刊

二 『橘曙覧』(歴代歌人研究)昭和十三年刊

三 『橘曙覧の人と芸術』昭和二年刊

四 『宗武・曙覧歌集』(日本古典全書)解説。昭和二十五年刊

三

曙覧が何歳で結婚したのか。京都遊学から引戻されて、間もなく結婚したように「小伝」は書いているが、年月は示さない。そこにいろいろ推測が生まれた。推測の手懸りになるのは、従来の二十歳生家帰宅説から、二十歳以後であること。頼山陽の高弟児玉三郎塾に入ったことから、その人の没年は天保六年正月であるので、京都から帰ったのはその以前でなければならず、その時点で結婚年を推測せねばならぬ。この年曙覧は二十四歳であるから、遅くとも二十四歳を余り下れないだろうということ。これらの点から二十歳から二十四歳の間と推定されたのである。ところが、二十歳帰宅説が崩れると、二十歳以後説も崩れざるを得ない。諸家の主な説を見ても、山田秋甫氏は歳に触れず、植松寿樹氏は二十四歳までに上京し、結婚も同年とし、土岐博士は二十三歳ごろ入洛しただろう、久松博士は二十二歳上京、二十四歳結婚という説を出されており、私もいままで、二十歳から二十四歳の間の説を出していた。折口博士は年齢に触れておられない。

戦後所在が明らかになった「累代忌日目安附略伝」には、曙覧には次のような若死にした子供があったことを記載している。

露夢嬰孩

曙覽之第一女、母直子酒井氏生、無幾死、名吉

(以音) 子天保七年丙申二月十五日没。

泡玉嬰孩

曙覽之第二女、母直子生、無幾死、天保八年丁酉

六月六日没。

これによると、天保七年、曙覽二十五歳の年には既に長女が生まれているから、遅くとも、二十四歳の年の初めには結婚してゐなくてはならない。長女が死んだ翌年には既に第二子を生んでいるから、結婚した翌年には子を生んでいると見るのが妥当である。すると、二十四歳結婚説が最も確実性があると考へたのであるが、昨昭和四十三年十一月になつて、空襲、地震等によつて焼失したと思われていた井手家の戸籍が、福井市役所除籍簿の中から発見された。

この除籍簿は明治四十年に書かれたものである。長男の井手今滋は明治四十年八月三十一日、東京都本郷区駒込動坂町一〇五番へ転籍と書かれている。住所は、藩時代の地名が改正されて、足羽郡東安居村明里第二七号八番地となり、平民、前戸主、亡夫井手曙覽と書かれ、直子の個所は次のように書かれている。

天保三壬辰四月十日、同

亡夫曙覽妻

泉坂井郡坂井港絶家酒井

清平二女入籍、明治参拾

母

なを

七年六月拾日正午拾貳時

文化十三丙子年

死亡

十一月十七日生

これによると、天保三年に既に入籍している。曙覽二十一歳、直子十八歳である。これが確かだとすれば、京都に上つたのは二

十歳以前であり、二十歳婦宅説はいよいよ成立しにくくなる。そして、二十二歳の年、伯父志田垣が死ぬ。「宣」の自伝にはこの間のことを、

管事如此者僅數年病歿。兄紹業以來……と書いているが、この書き振りで、伯父の死後、兄曙覽がすぐ業を継いだと考えられる。家業を継いでからはなかなか家を空けにくいだろうから、しかも家を継いで早々ではなおさらである。家を空けるなら、家が継がない前であるのが自然である。もつとも、曙覽は家を継いでもう一度々家を空けている。

さて、この戸籍であるが、直子が文化十三年生まれなら、明治三十七年は数え年八十九歳、満では八十七歳八か月である。ところが、明治五年に、近代、最初の戸籍が作られた。この戸籍は焼失したが、その写しが残されている。それによると、今滋の母、即ち曙覽の妻は、

母奈於

三国絶家会津屋清平亡女

八五

とあり、足羽県足羽郡第五区西山町組下西山下町とある。今滋はその時岐阜県権大属である。明治五年に五十八歳ならこれは数え年だから、文化十二年生まれになる。そして三十七年没なら数え年九十歳である。「小伝」は明治三十六年、九十歳というから、三十七年没なら九十一歳である。「曙覽聞書」は三十八年没九十二歳とし、明治五年戸籍の編集者石橋重吉氏は三十七年没、九十二歳とする。没年は「聞書」が記憶違いだと思つて、長男の今滋が親の歳を間違えるとも思われない。まだ親が生きているのだから

ら。そして墓碑の裏にも九十二歳とある。このように、没した歳が一致しないのは生年の考え方が違うということである。

今度発見された除籍簿の戸籍は、明治五年の戸籍とは書き方が変わっているから、途中で書きかえられ、その時に、生年月日が新たに加えられたものである。又、この戸籍は、東京へ転籍した時に、従来あった物を更に写しかえられたものであるかも知れない。そうしているうちに写し違いがないとも言われない。こうした点でなお、疑問がないでもないが、これを信頼するとすれば、結婚は二十一歳ということになる。

注一 『橘曙覧伝并短歌集』

二 『橘曙覧』（短歌講座）

三 『宗武曙覧歌集』（日本古典全書）

四 『橘曙覧』（日本古典文学大系）

五 『橘曙覧評伝』

六 『橘氏派源』（井手今滋著。明治三十四年以後出版。）に

付載せられたもので今滋が編集したものである。この本には正玄家の系図が同じく付載されている。山田秋甫氏の『橘曙覧伝』に付けられている系図はこれを簡略にしたものらしい。山田氏は『橘氏派源』を見ていたと思われるが、この書名を明らかにしなかったで、その所在が明らかでなかった。これは発行所も発行年月日も記されていない、所謂奥付けがない本であるから、親戚等に配るために、極めて私的に出版したものに違いない。従って現存するものは極めて少ないに相違なく、現在知られているのは、今

川氏に所蔵されている一本だけである。

七 明治四十年に戸主井手今滋が東京へ転籍したために除籍して、写しだけが残っていたけれども、既に全部焼失したものと考えられていた。昭和四十三年十一月に、木下甫氏が福井市役所で発見した。

八 明治時代最初の明治五年の戸籍である。この戸籍の原本は空襲の時焼失して現存しない。石橋重吉氏が編集して、昭和十七年八月に発行した『幕末維新福井名流戸籍調』の中に写しが収録されている。

四

曙覧は弘化三年（一八四六）に財産、家業を異母弟宜に譲って、足羽山の中腹に分家した。三十五歳の時である。この原因については、従来次のような事柄が挙げられていた。

一、父の死後、継母伊斯子と異母弟宜が家にいたので、他家から帰って来た曙覧との間が円満にいかなかった。

二、曙覧は、学問や文芸に熱中して家業の商業に不熱心であった。

三、学問や、文芸で身を立てるために家を出た。

第一の原因は、長男である今滋が、家庭の恥を外に公表するはずはなく、「小伝」には何等書かれていないことである。だから、家庭の情況からの推測に過ぎない。私は昭和十三年に出版した論文の中でこれを大きく取上げた。だが、そういう推測を下した動機をいまは全く思い出せない。そして、その後もその説を変えな

いで来たし、その後書かれた諸家の曙覧伝もその説を踏襲するものが多かった。

ところが、戦後、井手今滋著の「橋氏源流」の存在が明らかになって、それに付載されている「累代忌日目安附略伝」にある伊斯子の没年が明らかになると、この説は崩れざるを得なかつた。

その書には次のように書かれている。

名伊斯子 真光院妙栄信女

白銀屋氏（三国里人）寛了君

之後妻生二男、先夫君没、文

政四年辛巳三月五日没

文政四年というと、曙覧十歳、宣は三歳、父五郎右衛門は三十九歳である。曙覧が府中にいる時に死んでしまったので、母という感情も湧かなかつたのではなからうか。寛了君というのは父五郎右衛門の法名である。

第二の理由は、「小伝」にも書いているところであり、商業に適しない人であつたことは歌集の中に、次のような事があることでも知られるであらう。ある人が帳面を作つておいて、米薪、その他いろいろのことを書いておけといひるので、そのようにして一月、二月たつたが、あまりのわずらわしさに怠りがちになつた。自分で考えてみると、

おのがさがよいかにもてつけないはさんにも、かかることはたまじきなりけり

と思うようになり帳面を傍へうちやつて

夕煙今日はけふのみたてておけ明日の薪はあす採りてこむ

と詠んだという

さて、第三の理由であるが、小伝は「先子夙に其稟性の家業に適せざるを知り、父祖伝来の家業財産を挙げ、悉く之を家弟に譲与し、身を挺して家を去れり」と書いて、これは理由としては消極的であるが、後にいう事とあわせて見ると、重要なことである。ところが、今滋に依頼されて依田百川が書いた「橋曙覧墓碣銘」によると、

天保十年遊江戸既而意有所決、讓産於弟專従文学、研究国典傍善和歌（略）学成弘化三年卜居足羽山教授子弟

と書いている。これだと弘化三年に家を出る前に家を弟に譲っていることになる。そして国学を学ぶという目的がはっきりしている。足羽山から三橋町に移つてからも寺子屋を開いていたことは、教えを受けた菱川師福という画家が書いているから確かであるが、足羽山時代も寺子を教えていたであらう。生活の方法がなければ簡単に家を捨てるといふ訳にもいかないであらう。

学問に専念するために家を捨てるといふのはいかにも立派な事であるが、曙覧の場合は十分な生活が保証されている訳でもない。生活が貧しいことを歌に訴えている。家業を継いでいる時代でも、江戸へ遊学したり、飛騨高山田中大秀の許に遊学したりしている。家業を継ぎながら学問することが、彼にとっては最も容易な道である。理想のためには何物も犠牲にするといひるのは雄々しいことであるが、容易なことではない。表面はそうに見えるても、他に何らかの原因がある場合が多いのではなからうか。無暴な英雄というものはそうあるものではない。

江戸時代の地方都市で、学問だけで自活することは大変な難事であつたろう。武士の身で学問する者は多い。大抵はそういう人であつた。曙覧は生活の方法である家業を捨てたのである。これは重大なことである。彼は到頭恵まれない生活をあえてやりおえてしまったのである。その彼は立派であり、英雄の一人であらうけれども、最初決心する時に易々とその事がやり得たかどうか、そこに問題とすべきものがないかどうか。第三の理由はその通りで、その事自身に問題はないが、それは、余程の人でないことやり遂げにくい事である。曙覧としては、それは容易ならざる事であることは予知しての事と思われる。足羽山に移って後「世を遁れて後はそれとたのむべき生業もなく貧しう物しければ」と歌集に書いているが、それは初めから分っていたことであらう。後悔するような言動は何もない。生家での行動を考えると、彼の理想そのものの他に、その理想の道を行かねばならぬとした客観的原因がありはしなかったかと疑う。

そこで注目されるのは戦後発見された「宣自伝」である。前にも引いたが、その続きに当る部分に

兄紹業以来、嗜好于学、不事生産、而連遇災患、産稍落、遂讓業於宣

とあつて、兄は業を継いで以来、学を好んで実業に熱心でなく、その上火災に逢つたので財産も傾き、遂に宣に家業を譲つたのだという。これは今滋の「小伝」が言うところとある部分は一致す

る。家業が手に負えなくなって弟に譲つたのである。曙覧もここに於いては偉人ではない。平凡な人間に過ぎない。そこに彼の歌人としての面目があると思うが、このような運命に陥っていくところに、彼の個性があると思われる。学問を好み、文芸をよしとする性格が、このような道を辿らせることになったので、彼の意志以外の、客観的情况もまた彼を動かす動機となつたと見ねばならない。宣はなお続いて言う。

而別（曙覧のことをいう）営舎老焉。宣亦天資羸弱、且自幼嗜、始入梅洞前田先生塾、再入雁門蒔田先生塾。流寓幾年帰家。至是雖受讓負券鉅万、氣頗沮焉。

曙覧は別れて家を営んで老い、自分は身体が弱くその上學問を好んで二人の先生の塾に入っていたが家に帰つた。「負券鉅万」というのは、多額の負債を譲り受けたという意味だと思ふが、それだと相当の借財も残したものと思ふ。こうして曙覧は経済的理由で家を出たと思われるが、他方、それを決行させたのは、彼の學問、文芸に対する熱意であり、こうした絶対の境遇に立つたればこそ、今日見る輝かしい作品が残されたのだと思われる。

注一 大谷伊和雄氏「橋曙覧の家庭環境について」昭和二十九年五月号、『百日紅』。

二 明治二十七年、今滋の依頼により正六位依田百川が書いたもの。

三 菱川師福氏、「曙覧翁と私」（橋曙覧書簡集付録）